

宗谷丘陵の「周氷期地形」は、日本の地形の中でも特に北北海道らしい特徴を示す貴重な存在です。これらの地形が形成されたのは主に最終氷期（約7万～1万年前）で、とくに寒さが極まった約2万年前ごろが中心と考えられます。この時代、宗谷地方は氷河に覆われたわけではありませんが、地面が深く凍結する永久凍土に近い環境となり、「氷河の周辺に広がる極寒地帯」である周氷期環境が成立していました。宗谷丘陵はその寒冷な気候条件のもとで形づくられた地形なのです。

周氷期地形の成因は、冬の凍結と夏の融解が繰り返されることにあります。地面が凍ると膨張し、融けると沈むというサイクルが何千年も続くことで、岩石は砕かれ、土壌はゆっくり移動します。この作用を周氷河作用と呼びます。宗谷丘陵のなだらかで丸みを帯びた丘陵は、こうした凍結融解による斜面の削剥や土の流動（ソリフラクション）が長期間続いた結果として生まれたものです。鋭い山地とは異なる、均されたような丘の連なりが周氷期地形の大きな特徴です。

さらに宗谷丘陵では、構造土と呼ばれる地表模様も見られます。凍結によって石が押し出され、輪状や多角形状の模様が形成される現象で、周氷期特有の証拠となります。ただし現在の宗谷地方では周氷河作用は弱まり、氷期ほど活発には働いていません。そのため宗谷丘陵の周氷期地形は、過去の寒冷気候が残した「化石地形」として位置づけられます。宗谷丘陵は、日本列島が氷期に経験した厳しい寒冷環境を今に伝える、重要な自然の記録と言えます。

この図形は、宗谷丘陵の地形図に、標高別にビビットな色付けをしたものです。実にアバンギャルドな色彩と模様になりました。

